

北方圏住民の参画型地域行事に関する教育人間学的研究 ～北方圏における地域文化の伝承に関する調査研究の中間報告～

An Education Anthropological Study on Participatory Regional Functions and Folktales : An Interim Report of an Investigative Study on Local Cultural Traditions in the Northern Regions

山 谷 敬三郎 (代表)
YAMAYA, Keizaburo
藤 原 等
FUJIWARA, Hitoshi
山 田 亮
YAMADA, Ryo
塩 田 秀 樹*³
SHIOTA, Hideki
オウティ イハライネン*⁶
Outi, IHALAINEN

B . M . ヤ ン グ
Blake Morgan YOUNG
末 岡 一 伯
SUEOKA, Kazunori
耿 鉄 珍*¹
GENG, Tiezhen
水 本 秀 明*⁴
MIZUMOTO, Hideaki

佐々木 邦 子
SASAKI, Kuniko
小 田 史 郎
ODA, Shiro
高 田 紀 子*²
TAKADA, Noriko
川 上 セ イ ヤ*⁵
KAWAKAMI, Seiya

I は じ め に

本研究報告は、文部科学省高度学術研究拠点事業の指定を受けた、北海道浅井学園大学北方圏学習情報センターにおける「北方圏における『QOLの向上』に関する総合的研究」に関する地域文化研究プロジェクトの中間報告である。全体研究は、北方圏に住む乳幼児から高齢者、健常者から障害者に至るまで、すべての人々が快適かつ健康で、安心して暮らすことのできる質の高い社会生活を実現する方向性を明らかにすることにある。このため、国内外におけるこれまでの研究成果を活かした多面的に学際的な研究を総合的に進め、行い、福祉・文化の政策やこの分野での社会的・経済的な活動内容を提案し、さらにはそれらの成果を適切なメディアを通じて、国内外に発信しようとするものである。特に積雪寒冷地域での諸問題を明らかにし、具体的な改善策を北方圏の人々に提供することも研究目的に含めている。また、このプロジェクトは、北海道の地域振興に寄与しようとするものである。

II 地域文化研究プロジェクトの研究概要

1. 地域文化研究プロジェクトの研究目的

地域文化研究プロジェクト（以下本研究プロジェクトと略）は、北方圏4カ国における地域に伝わる、民話や伝統芸能・祭り・地域行事に視点を当て、それらに含まれる世代を超えて伝えられる文化の発掘とその伝承の方法、さらに、教育的意義について国際的な比較研究を行うことを目的に掲げた。ここでは、北方圏としてその地域性、風土、季節感等の類似性を考慮し、北海道全域、カナダ太平洋沿岸、中国東北部、フィンランドを選び、それらの国(地域)に

* 1 哈爾濱工業大学教授
* 3 ニューヨーク日本人学校教諭
* 5 北海道フィンランド協会顧問

* 2 北海道口承文芸協会会員
* 4 北海道フィンランド協会理事
* 6 ヘルシンキ大学大学院生

における世代間交流の地域参画型活動等の在り方を教育人間科学的研究の視点から考察する。全体研究のテーマ「QOLの向上」における精神生活、文化的生活に関する研究と位置づけている。

2. 本プロジェクトの研究方法

本研究プロジェクトが対象としている参画型地域行事とは、人々が日常生活を送る上でその精神生活、文化的生活のよりどころとしている地域における祭りや伝統芸能、そして民話を指している。これらに焦点を当てたのは、地域に根ざし地域の人々がそれらの祭りや伝統芸能に参加して得られる喜びや誇り、また、地域に伝承されている民話を次の世代に伝える喜びや誇りが人々の地域への愛着観や郷土愛に結びつくと考えたからである。本研究プロジェクトでは、対象として取り上げる行事や伝統芸能、民話の収集、発掘、研究は、膨大な先行研究が既に存在していることから、それらの先行研究の成果を参考にしつつ、その伝承、活用についての研究を行う。具体的には、以下の研究方法によりその目的を達成することを計画している。

1) 基礎・基本的文献の収集

祭り、地域行事、民話等に関する分類、位置づけに関する基本的文献の収集について、特に北方圏に関連する資料等の基礎的・基本的研究を位置づける。

具体的には「民話研究に関する文献」、「各地・各国に見られる民話、地域行事についての説明文献」「子ども向けの民話・絵本」などを収集し、祭り、地域行事、民話に含まれる地域性、精神的ささえになる価値観などに基づく整理分類の方法、形式、内容を焦点化する。

2) 調査研究の計画

北海道、カナダ太平洋沿岸、フィンランド、中国における地域行事、祭り、民話等に関して、「その地域の謂われ」と「その地域の先人精神的支えとしての価値観」に視点を充てるとともに、「語り部」の存在に対して悉皆調査を計画・実施する。また、その調査を基に、語り部については直接面会を求めて聞き取り調査を計画・実施する。さらに、これらの調査で収集した資料を基に、それらの中に含まれる郷土愛、精神生活の支えになる価値についての調査を次のように計画・実施する。

- ①第一段階調査（民話・地域行事、語り部に関する悉皆調査、平成14年度）
- ②第二段階調査（民話・地域行事、語り部に関する聞き取り調査、平成15年度）
- ③地域行事、祭り、民話に関する国際比較読本（仮称）の作成（平成16年度）
- ④第三段階調査（地域行事、民話についての意識調査、平成17年度）

3. 本研究プロジェクトの研究内容

研究の最終段階では、4カ国語による民話、地域行事の紹介に関する資料作成とCD又はDVDの制作を行う。また、それらを用いた視聴等の調査により北方圏に居住する人々の精神生活の向上における民話や地域行事の貢献度、教育的意義について実証する。

そのための研究内容として、①民話・地域行事の独自性と共通性の把握、②民話・地域行事の語り手と受け手の意識調査、③民話集・地域行事の解説書の発行、④民話集の4カ国語版によるCD又はDVDの制作、配布（日本語、英語、フィンランド語、中国語）を計画している。

Ⅲ 基本的研究の内容について

1. 民話に関する定義と分類

「民話」に関連する言葉は、「民間説話」「民話と伝説」「昔話と伝説・民話」「現代民話」「口承文芸」「お伽話」「伝承説話」「民族説話」「民鐸」「遊離説話」「メルヘン」「フォークテール」「コント」「ポピュレール」というように使われている。そして、その分類・形式・モチーフ・性格・特質・伝承事情等が内容的にも歴史的にも地域的（世界・日本）にも異同がある。この問題を整理しようという試みが柳田国男・関敬吾・臼田甚五郎・大島建彦・福田晃・稲田浩二・野村純一諸氏らによってなされてきた¹⁾。

民話は、①口頭伝承の文芸である。しかも民衆・庶民の語りを背景にしている。語りは変容しながら成長し、定着し、また、変容して後世に語り継がれていく、②地域・家族の中に語りの場があり、基本的なモチーフを維持しながら周期的に伝承されていく、③近代になり、学校教育が発展すると文字文化は普及するが、語りは無文字文化を基本的には背景とする、④過去への郷愁のみならず未来へのメッセージを秘めている。劇・絵本・映画・テレビ・読み聞かせ等を通しての再話活動としても発展している。民話の分類には多種多様なものがあるが、ここでは下にあげる阿部敏夫氏の分類を参考にし、それぞれについてその位置づけを整理する。

1) 神話 2) 昔話（笑話も含める） 3) 伝説、4) 世間話 5) 俗信 6) なぞなぞ 7) ことわざ 8) 語り物一座頭・ゴゼ唄、祭文語 9) 呪文 10) 祝詞 11) 歌謡—わらべ唄、地唄 12) 談話・逸話—開拓話等— 13) 史実 14) 現代民話—今話、ちょっと前の話、戦争話等である。

2. 民話の分類と内容の概要

歴史的にも内容的にも現段階までの研究成果を紹介している福田晃・常光徹・斎藤寿始子編『日本の民話を学ぶ人のために』世界思想社2000年10月総説4～59P、福田晃編『民間説話日本の伝承世界』世界思想社1989年三月8～35Pを手掛かりに現段階の民話をその内容から分類する。

(1) 神話

金光仁三郎は、「神話はフィクションというより、まさに心理を表現しているのである、というのも、神話が語っているのはもっぱら現実だけだからである。」「神話は、世界や人間や生物が超自然的な期限と歴史を持っていること、また、この歴史が意味深く貴重で模範的なものであることを教えてくれるのだ。」と説明している。そして、福田晃氏は、民間神話の分類を以下のように提示している。

- 1) 宇宙の起源—「天地分離」「月と太陽」など
- 2) 神々の起源—「ミルクとサーカ」「雨の神と竜宮の神」など。
- 3) 国土の起源—「アマンチユウの足跡」「流れる島」など。
- 4) 神々の島建（「国土創造」＋「夫婦の始まり」＋「農耕起源」）—「奄美の島建国建」

「宮古島の始まり」など。

- 5) 人類の起源－「兄妹始祖」「犬婿始祖」など。
- 6) 神の子・神の嫁－「蛇神の子」「天女の子」「太陽神の嫁」など。
- 7) 文化の起源－「火種子」「鶴の穂落し田」「五穀の始まり」「舟の始まり」など。
- 8) 祭事の起源－「ヤーマス御願由来」「マユンガナシ由来」など。

(2) 昔話

神話は現実にあった話として伝承するが、昔話は虚構の世界として伝承する。しかし、虚構の世界は現実世界の反映でもある。また、現実世界の喜怒哀楽が文芸化されているのが昔話である。その昔話の世界を分類したものには、関敬吾・野村純一・大島廣志氏のものと稲田浩二、小澤俊夫氏によるものがある。ここでは前者の分類を紹介する。

- 1) 動物昔話：①動物葛藤 ②動物分配 ③動物競走 ④動物競争 ⑤猿蟹合戦 ⑥勝々山 ⑦古屋の涼 ⑧動物社会 ⑨小鳥前生 ⑩動物由来 ⑪新語型
- 2) 本格昔話：①婚姻・異類譚 ②婚姻・異類女房 ③婚姻・難題筆 ④誕生 ⑤運命と致富 ⑥祝宝鐸 ⑦兄弟鐸 ⑧隣の爺 ⑨大歳の客 ⑩継子渾 ⑪異郷 ⑫動物報恩 ⑬逃鼠渾 ⑭愚かな動物 ⑮人と狐 ⑯新話型
- 3) 笑話：①愚人鐸 ②誇張鐸 ③巧智鐸 ④狂滑者鬱 ⑤形式弄 ⑥新語型 ⑦補遺

(3) 伝説

伝説は、「うわさや風説などをさし、口承により、古くから伝わってきた文学」といわれているが、その内容により、＜文化叙事伝説＞と＜自然説明伝説＞の二つに大分類される。

- 1) 文化叙事伝説：①人類創成 ②始祖 ③前任者 ④巨人 ⑤他界 ⑥神・神事・神仏・人身御供 ⑦英雄 ⑧精霊
- 2) 自然説明伝説：⑨星 ⑩月 ⑪山 ⑫木 ⑬石 ⑭草 ⑮魚 ⑯祠堂 ⑰金

(4) 世間話

世間話は、『東京都大田区史（資料編）民俗』において、次のように説明されている。

「世間話といわれる内容の話は、昔話とは異なって、素材も豊富であり、話し方も自由自在である。世間話の素材は、昔話や伝説から取り入れたものもあるが、大部分は不思議な珍しい話、いわゆる奇事異聞で占められている。話し手は、変わった珍しい素材を、その場その場の聞き手や土地柄に迎えられるように、自由なもの言いで話していく。いわば噂話的なものが多いのであるが、話の素材や構成も固定化し、各地に共通する型さえ生まれている。話のなかには、特定の地名や人名を繰り返す、その地にふさわしい森や川や山、家や人を配し、事実談・経験談として、まことしやかに話されるものが多い。このような世間話には、その時代、その地域社会に生きてきた人々のさまざまな生活感情や、自然観などが映し出されている。」

福田晃氏が分類している世間話の三つを紹介する。

- ①神仏の塞異：A. 霊異 B. 功德 C. 祟り
- ②妖怪の奇異：A. 妖怪 B. 変化 C. 死霊
- ③動物の不思議：A. 習性 B. 報恩 C. 報復
- ④人間の運命：A. 非運 B. 幸福 C. 因縁

⑤人間の異常：A. 行為 B. 性格

(5) 俗信

板橋作美氏は、俗信の研究現状をその著書「俗信の論理」の中で次のように述べている。

「俗信の研究については、俗信全般にわたる井之口章二の研究をはじめとするすぐれた考察がいくつかあるものの、民俗学のほかの分野、あるいはほかの信仰にくらべると、俗信研究はすすんでいると言えない。…民俗誌のレベルでは大きな扱いを受けていながら、研究書となると数は少ないし、民俗学の概説書や講座ものでも、俗信はほんのわずかのページしか与えられていない。」「いわゆる俗信は、ほんの数十年前までは生活のさまざまな場面で口にされた。それらは、たわいもない言葉遊びであったり、村の物知りや御幣かつぎのとるにたりない知識にすぎないことが多いが、ときには道德規範、社会規範として人びとの行動を律したり、まよったりしたときの判断基準や指針にもなっていた。」そして板橋作美氏は同書で俗信研究試論を「1.はじめに 2.俗信のとらえかた 3.俗信の仕組み 4.文化の論理」と提示している。

(6) ことわざ

小学館『故事・俗信 ことわざ大辞典』(1982(昭和56)年2月)は、1) 故事 2) ことわざ 3) 慣用句 4) 俗信・俗説 5) ことば遊び・しゃれ・和歌・俳句・川柳などの五つに分類し、約43,000項目を収録している。「この国土に生きた人々の姿を日本のことば、民俗という視点で捉えるための参考として、また一つには、社会のひずみ、歪んだ発想や侮見、人間の業の探さを見る資料として、つとめてわかりやすく配列しました。歴史的事実を現代に反省の糧として、よりよき対応を生むことを願いたします。」と述べている。

IV 本研究プロジェクト調査研究の内容について

1. 北海道の状況に関する調査研究の概要

北海道の状況を把握するために『北方圏における「民話」、「伝統芸能・祭り等」の伝承の状況に関する調査』と題した調査票を作成し、全道212市町村を対象にアンケート調査を実施した。その調査計画・内容についての概要は以下のとおりである。

- (1) 調査時期：平成14年8月～9月
- (2) 調査対象：北海道内212市町村教育委員会生涯学習担当者
- (3) 回答数：117市町村、回答概要は下記の状況である。
- (4) 調査結果の概要

北海道における調査集計概要

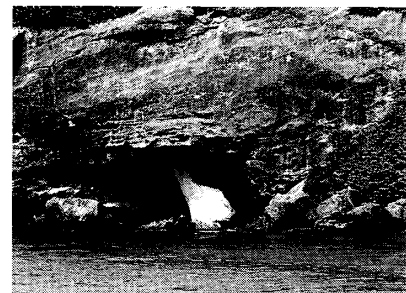
(単位：市町村数)

1. 民話があるかないか ある 32 (市町村から紹介された分500～600話)
2. 語り部がいるかないか いる 5人
3. 民話について次世代へ伝えるために講座等の学習機会を設定しているか。
 設定している 3 設定していない 29
4. 他の市町村にはない独自の伝統芸能・祭り・地域行事等について
 ある 62 ない 52
5. その行事は、「親の世代から子の世代そして孫の世代」へと、その行事を通して参加者が文化や慣習

を伝えることができるものか。	
はい	53
いいえ	8
6. それは下記の行事のどれに該当するか。(複数回答可)	
伝統芸能	50
祭り	21
地域行事	4
7. その行事の世代間交流の状況について下記に該当するものはあるか。(複数回答可)	
ア. 二世交流が主であり上の世代から下の世代に文化や慣習が伝承されている。	23
イ. 三世交流が主であり上の世代から下の世代に文化や慣習が伝承されている。	17
ウ. 世代間の交流はあるが、特に文化や慣習の伝承はみられない。	11
エ. その他	14
8. そのような行事について御自治体は、どのように取り組んでいるか。(複数回答可)	
ア. 主催事業として推進している。	3
イ. 支援事業として位置付けている。	48
ウ. 主催または支援事業をするよう検討している。	2
エ. 推進も支援もしていない。	5
オ. その他	8

北海道の市町村から寄せられた回答から浮かび上がったことを確認してみたい。回答による民話の総数は数百話にのぼり予想以上の数であった。それらは、冊子として形に整えられ、あるいは町史の中に組み込まれているなど、市町村の教育委員会が文化の伝承を目的として保存を重視していることが十分看取された。民話を語り継ぐ語り部の存在については回答では5人と非常に少なかった。しかし、民話、語り部いずれにしても市町村の回答だけではなく、潜在的に存在することが、調査後に次第に判明してきている。

他の市町村にはない独自の伝統芸能・祭り・地域行事等があると回答したのは62市町村であり、このうち53市町村が、伝統芸能などを通じて参加者が文化や慣習を伝えることができるものであると判断している。その場合の、行事における世代間交流の状況は、三世交流中心と回答したのは17市町村、二世交流を中心としたのは23市町村であった。三世よりも二世の方が上回ったのは、現代社会の核家族化の影響が考えられよう。これらの行事についての取り組みでは支援事業として位置づけている自治体が48と群を抜いていた。この主な理由として、①市町村の無形文化財に指定している。②歴史的に意義のある伝統芸能を後の世に伝承する。③補助金の交付により②の保存活動を支える。④郷土学習資料として有効活用する等があげられている。主催事業としての推進、支援事業のいずれもしていないとの回答は5市町村であったが、この理由としては、保存団体各自の活動の独自性を尊重するためというのが中心であった。さらに、子どもを対象とした教育の中にこれらの活動を含めている例も多く見られた。地域に伝わる伝統芸能への子どもの参加、また、民話を子どもに伝える活動もいくつかの自治体で実施されている。一つの例であるが、道南のある町では、「民話を通してふるさとを学ぼう」という企画を教育委員会が実施している。町内の民話の残っている場所を巡る体験型学習である。このような自治体の取り組みからは、文化の伝承に対する真摯な姿勢とその活動の教育的意義について窺い知ることができ、それは本研究プロジェクトの視座と同様であり、深く共感を覚えるものである。



義経を待つ馬岩(江差町)

(5) 北海道の民話例

収集した民話の中で、人物に関して意外と多いものに「義経伝説」がある。ここでは、島牧村の義経伝説（古館鼠之助著「松前追分」）の一例をあげる。

文治2年（1186）の夏、今の本目の手前、永豊の脇から、政伯を望んだ海岸に一艘の和船が入った。これこそ誰であろう、義経主従を乗せた船である。ところが、その夜、奇しくも、チャレンカムイ岬の突端が真っ二つにわれて、一つは陸近くに、一つは数百間も離れた沖の方に、あたかも奥地へ入る船を見守るように屹として立った。神威岬から北へ女を入れさせなくなったのは、それからである。

2. カナダの状況に関する調査研究の概要

(1) 訪問調査の概要

前項で言及した北海道における地域行事、祭り、民話とその伝承に関する状況を把握する目的と同様にカナダにおける調査を計画し、その事前調査を研究グループで検討した。北海道と同じ方式ではカナダは地域が広いこと、膨大な調査標本となること、また、回答に関する時間的余裕がないことなどが課題として浮かび上がった。そこで、北海道と類似している地域に限定すること、また、先住民族と移住してきた現カナダ人の両者の状況を把握できるように代表的な地域を抽出し、事前に北海道で用いたアンケートを英訳したものを発送し、その回収と面接調査を兼ねる方式を採用した。平成15年2月末より3月初旬にかけて、山谷、ヤング、佐々木の3名が事前に調査票を送付し面接日時の回答を得た以下の20カ所を訪問した。

- ① アルバータ州カルガリー市内及び近郊－教育委員会4カ所、Stoney First Nation、Tsuu T'ina First Nation
- ② アルバータ州南部－教育委員会4カ所、Blood Tribe First Nation、Peigan First Nation、Head-Smashed-In Buffalo Jump
- ③ ビクトリア州ビクトリア市内及び近郊、教育委員会2カ所、Saanich First Nation、Native Heritage Society Cowichan Band、Snuneymuxw First Nation、Chemainus Indian Band等

(2) 特徴的な訪問先の紹介

1) BLACKFOOT FIRST NATIONS

この部族は最も攻撃的で強力な種族として知られている。この種族名は、焼き放たれた草原でまだくすぶっているうちに足を入れたために、足が黒くなってしまったという由来がある。BLACKFOOT FIRST NATIONSはバッファローを狩猟し、毛皮、骨、肉すべてを生活に用いたが、そのバッファローの狩の手法に特徴がある。崖まで追い込み、落下するバッファローを崖の下で待ち構えて獲った。現在、アルバータ州南部にある博物館はその舞台となった自然の崖を利用している。



HEAD-SMASHED-IN BUFFALO JUMP

崖まで追い込み、落下するバッファローを崖の下で待ち構えて獲った。現在、アルバータ州南部にある博物館はその舞台となった自然の崖を利用している。

<回答の概要>

ここには創造神「太陽」の使徒であるとするナピに由来する伝説他多数存在し語り部もいる。

それらの民話を伝承するための学習機会も設けており、その目的を次のように述べている。

「我々の文化はすべて文章にされているわけではない。多くは人から人への口承で伝えられている。この伝説を伝える目的は、我々の子どもたちが価値観、伝統を保存することである。こうすることによって我々はその知識または文化をなくすことはない。

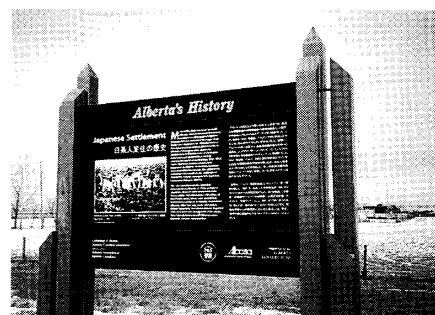
親・組織・教員など種族の年寄りによる語り部によって我々の伝統と文化は伝えられる。また、我々の学校のカリキュラムに組み込まれている。その民話や伝説の組み込みによって、多くの子どもたちは人生の価値観を養い、その上種族の言語を忘れない。言語と文化をなくさないことが我々にとって非常に大切なことである。文化は何世紀にもわたって世代から世代へ伝えられているが、伝統芸能、伝統儀式には一般の人々は出席できない。」

2) Rocky View School Division

ロッキー山脈を展望できるカルガリー市の西部に位置している。School Divisionとは校区のことであり、子どもの教育の他に成人教育など、担当区域の教育に関する全般を受け持つ。

<回答の概要>

民話に該当するものはCommunity history books、Native First Nation Storiesとして著されており、それら書籍の多くは公立学校や図書館に置かれている。また、地域でも広く販売されている。地域行事では、3世代にわたって伝承されていると考えられ、自治体では広告によって、時には参加によって支援している。下記が代表的な地域行事である。



日系移民の歴史を紹介している
アルバータ州南部国道沿いの看板

- ・ Cochrane rodeo カックラン・ロデオーカルガリー市西北の小さな町Cochraneで毎年夏に行われるカウボーイのイベント
- ・ First Nationの人々が保留地で行うイベント

(3) カナダの先住民族について

今回の調査で我々は何種かの先住民族と接した。カナダにおける現在の先住民族を理解するために概略を紹介する。

A 大分類：カナダ全域にまたがる先住民族の分類

- | | | |
|---|--------------------------------|------------------|
| A 東部森林地帯の移住種族(Migratory Tribes) | b 平原種族(Plains' Tribes) | c エスキモー (Eskimo) |
| d 山岳種族(Cordillera Tribes) | e 太平洋岸種族(Pacific Coast Tribes) | |
| f 東部森林地帯の農耕種族(Agricultural Tribes) | | |
| g マッケンジーとユーコン川流域種族(Mackenzie and Yukon River Basins Tribes) | | |

B 中分類：大分類はさらに下記の38の種族に分かれる。カタカナ表記は、人類学上一般的なものを使用した。中には訳者である山谷が便宜的に付したのものもある。

- | | | |
|--|---------------------------------------|------------------------|
| A 移住民種族 | | |
| ア) ベオツク (Beothuk) | イ) ミクマク (Micmac) | ウ) マレシート (Malecite) |
| エ) アルゴンキン (Algonkin) | オ) オジブウェー (Ojibwa) | カ) クリー (Cree) |
| キ) モンターネとナスカピ (Montagnais and Naskapi) | | |
| b 農耕民種族 | | |
| ア) ヒューロン (Huron) | イ) イロコイ (Iroquois) | |
| ウ) トバッコとニュートラル (Tobacco and Neutrals) | | |
| c 平原種族 | | |
| ア) アシニボイン (Assiniboine) | イ) 平原クリー (Plains Cree) | ウ) ブラックフット (Blackfoot) |
| エ) サーシー (Sarcee) | オ) グロスベンターとスー (Gros-Ventre and Sioux) | |
| d 太平洋岸種族 | | |
| ア) トリンギト (Trinkit) | イ) ハイダ (Haida) | ウ) チムシアン (Tsimshian) |
| エ) ベラクーラ (Bella Coola) | オ) クワキウトル (Kwakiutl) | カ) ノートカ (Nootka) |
| キ) コーストサリッシュ (Coast Salish) | | |
| e 山岳種族 | | |
| ア) 内陸サリッシュ (Interior Salish) | イ) クーテネー (Kootenay) | ウ) チルコテン (Chilcotin) |
| エ) キャリア (Carrier) | オ) ツェトソート (Tsetsaut) | カ) タールタン (Tahltan) |
| キ) タギッシュ (Tagish) | | |
| f 河川流域種族 | | |
| ア) セカニ (Sekani) | イ) ビーバー (Beaver) | ウ) チペワイヤン (Chipewyan) |
| エ) イエローナイフ (Yellowknife) | オ) スレービ (Slave) | カ) ドグリブ (Dogrib) |
| キ) ヘア (Hare) | ク) ナハニ (Nahani) | ケ) クチン (Kutchin) |

①アシニボイン (Assiniboine)

平原種族は、農耕種族のイロコイ族に最も近いところで生活していた。名前の由来は「熱い石で料理する人々」の意味である。ダコタシオウクス族から分離した種族と推測される。狩猟を中心としていたが、オジブウェー族の近隣で生息していたアシニボイン族には穀物などの栽培や粘土による食器が用いられていた。二つの生息地に分かれていたが、クリー族と同盟し、ブラックフット族連合と激しい戦いを続けた。また、シオウクス族やマンダン族、アメリカの他の種族、ロッキー山脈を越えてクーテネー族やサリッシュ族とも戦った。バッファローを囲いに追い込み、焼き、蒸して食料とするとともに、皮は日常生活のテントや衣類などに用いた。一時期の広がりから、戦争による疲弊、海外からの水疱瘡の影響、ヨーロッパ人との戦いなどから、現在は数カ所の居留地に分かれて生活している。南方に生活している部族は、モンタナ州のフォートベルクナップ付近に生活し、北部では、今日一般に知られているストーンイ族がサスカッチワン地方とアルバータ州にいくつかの小さな部族に分かれて居住している。大きな部族はカルガリー市とバンフの間のモーレイ付近に居住している。クリー族とはかなり習慣や言葉などで類似しているが、それぞれの部族では独自性を堅持している。

②平原クリー (Plains Cree)

平原クリーは、ヨーロッパ人が入植する以前は、ブラックフット族とサーシー族との戦いのために、アシニボイン族や他の平原種族と同盟を結んでいたと思われる。1835年から1858年にかけて流行した水疱瘡のために、1,000名以下に激減した。現在では、平原地域のアシニボイン族と同じ居留区で生活している。平原クリー族は、元々12の種族からなっている。移住民族種族にもクリーという種族が存在し、その生活様式は同じである。

③ブラックフット (Blackfoot)

最も攻撃的で強力な部族とされているのはブラックフット族である。南東に接していたグロスベントレ族とは通常は友好関係にあったが、時には敵となった。ブラックフットは、平原インディアンの無宿者となった。このブラックフット族も三つの種族に分かれている。

④サーシー (Sarcee)

アルバータ州に住むサーシー族は、インディアンの言葉で「よくない (not good)」の意味の言葉をもっている。ビーバーインディアン族の言語に最も近い。非常に少ない種族で、現在では160名ぐらいであり、ブラックフット族やクリー族と交わっている。

⑤グロスベントーとスー (Gros-Ventre and Sioux)

グロスベントー族、あるいはビッグベリインディアン族と言われ、正確にはカナダインディアンとは言えない。アシニボイン族やクリー族の圧力を受けて南に移住した種族である。似たような種族にダコタスー族がある。スー族はオブジウェー・インディアンの言葉で「ガラガラ蛇」「敵」の意味から由来している。

太平洋岸種族には、北方の3種族トリンギト族、ハイダ族、チムシアン族は混合しているが、南方のクワキウトル族、ベラクーラ族、ヌウトカ族はそれぞれ独立している。それらは大きく下記の7種族に分かれ、それぞれ独自の生活様式を持っている。

①トリンギト (Tlinkit)

南東アラスカの海岸地方に生活している。ヨーロッパ人との接触以前のわずかな期間、ハイダイインディアン族に植民地化されていた。彼らの3分の1は、子どもの時に近隣の種族から誘拐されてきた人を含む奴隷であったり、トリンギト族自身の囚人であったりするが、大多数の捕虜はサリッシュインディアン族である。トリンギトはもともと「人々」の意味である。

②ハイダ (Haida)

ハイダ族(ハイダも人々の意味の言葉)は、クウィーン・シャーロット島に生活する種族である。その生活様式のほとんどは海に依存していた。陸の生き物は黒熊以外はほとんど狩猟対象としなかった。

③チムシアン (Tsimshian)

「スキーナ川内部に住む人々」という意味を持つチムシアン族は、三つの部族に分かれる。一つは純粋チムシアン族で、二つ目はギトクサン(スキーナ川の人々)族、三つ目はニスカ族(ナス川流域に住む人々)である。これらの種族間に習慣の違いはないが、特に言語において若干の方言的な違いが認められる。ギトクサン族やニスカ族は山やぎや熊を狩猟していたが、チムシアン族は海の動物を主に狩猟の対象としていた。チムシアン族とギトクサン族は4つの階層に分かれていた。奴隷と一般人と貴族であり、その上に王室族があった。これらはハイダ族にもその原初的なものが見られた。

④ベラクーラ (Bella Coola)



海洋民族Saanichi First Nationの小学校

チムシアンのおすぐ南、ダグラス海峡の付け根に生存しているのはクワキートル族であり、このクワキートル族の領地に突き出す形でベラクーラ族がいる。ベラクーラ族は、チムシアン族との婚姻関係を好んでいなかった。今日、ヨーロッパ人によってもたらされた伝染病の影響もあり、ベラクーラ族は300人にも満たない状況であり、ベラクーラ湾に一つある村に居住が限定されている。この種族の言語は、現在、サリッシュ族の言語によってかなり影響されている。

⑤クワキウトル (Kwakiutl)

クワキウトル (川の対岸の砂浜の意味) 族は、バンクーバー島の北部に生活している。この種族もハイスラ族、ヘイルトサック族、そして、純粋クワキウトル族に分かれている。すべてのクワキウトル族は姻族による一族「家系図的な家族」により構成されている。クワキウトル族の人々は一般に死ぬと木や洞窟、特に特別な酋長はカヌーに埋葬される。

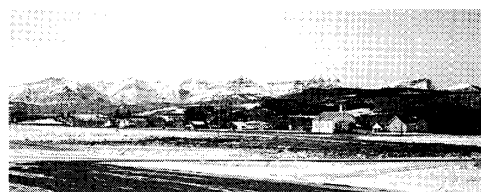
⑥ヌートカ (Nootka)

ヌートカ族は、ブリティッシュコロンビア州にいる唯一の鯨を狩猟する民族であることが他の民族と異なる。ハイダ族のように部分的に海の哺乳動物に頼るのではなく、彼らは小さいときからカヌーを操ることを学ぶ。そして、酋長だけが鯨に銚を打ち込むことができる。

⑦沿岸サリッシュ (Coast Salish)

(4) カナダ調査で知りえた伝説の例

アルバータ州カルガリー市から西の方角に車で1時間半ほど走ったところ、ロッキー山脈を見渡すことのできる雄大な土地の一角にストーニー族の保留地がある。現在の種族代表者が、訪問者である私達の前で、父や種族の年長者から聞き知っていたことを、ゆっく



ロッキー山脈を背景にしたモーレイ地区、ストーニー種族の保留地

りと、一つずつ思い出すように語ってくれた。それが次のトリックスターの話である。

トリックスターは大昔からいた男の人です。たいへん頭がいい人で、時には自分自身をも驚かすぐらい賢いそうです。トリックスターはユーモアたっぷりの賢い雄弁な人です。時には思いがけない難儀に遭うこともあるけれど、それは私達への教訓ともなります。こんな話があります。

昔、コロンブスがアメリカ大陸にやってくるよりずっと昔のことです。二人の若者がトリックスターをお願いをしようと探しに出かけました。あらゆるところを探した挙句に現在のフロリダ州の西の方で彼を探し出しました。トリックスターは、カボチャやヒョウタンを植えてある野菜畑の手入れをしていました。

「帰ってきてください。あなたがいなくて困っています。」と男達が言い、トリックスターを連れて帰って行きました。

「どうして私を連れて帰るの？」

「お願いがあるからです。」

「どうぞ遠慮なく。どんなお願いでもかなえてあげましょう。」とトリックスターは言いました。

すると一人の男が、「私はとてもハンサムになりたい。女性に好かれて妻もたくさんもらいたい。だから美男子になりたい。」と言いました。

「さあ、ここに小さな池があるでしょう。そこへ行って飛び込んでごらん下さい。」男は言われるとおりにしました。するとたちまち美しい白鳥になってしまいました。

その池は今もストーニー種族の保留地にありますよ。その様子を見て、もう一人の男は用心深くなりました。友達のように変形したくなかったからです。ですから、トリックスターが、「何か欲しいの？」と聞いたとき、男はよく考えてこう言いました。「私は長生きして、長い長い間この世にいたいと思う。この地球がある限りここにいたい。」

「それではあそこに行って座りなさい。」とトリックスターは言いました。そして、男がそうしたとたんに男は巨大な山になってしまいました。

その山は今もカンモルという町から見ることができます。アルバータ州政府の文化大臣と私はその山に「エハゲナコダ」と名づけました。「最後のナコダ」という意味です。「ナコダ」はストーンニー種族の別名です。今でもその山が見えますよ。カンモルに行ってその町の人々に聞いてごらんください。

3. 中国調査の概要

平成14年10月、山谷が中国黒竜江省哈爾濱市を訪問し、研究協力者耿鉄珍氏と調査についての事前協議を行い、郵送による調査は困難であるとのことから中国における調査方法を直接聞き取り方法による調査とすることを決定し、以下のような調査によりその状況を把握した。

- 1) 調査地域：哈爾濱市を含め7カ所
- 2) 調査対象民族：漢民族、朝鮮民族、満民族、モンゴル民族、キルギス民族、倫春民族
- 3) 調査結果の概要

①民話数：「尾のない李さん」他38編 ②地域行事：4件

地域行事は代表的なものとして、哈爾濱市政府冰雪節分室が主催する1963年から実施されていた「哈爾濱氷祭」、1985年から実施の「哈爾濱、冰雪祭」がある。極寒期の1月5日を氷祭、冰雪祭の日に定めており一月間ほど続けられる。これらは、中国ではじめての冰雪芸能による冬季の祭りであり、北方の特色を持っている喜びの地域行事として捉えられている。

③回答例の概要

民話を次世代に残すための学習機会も、次のような目的により設定されている。

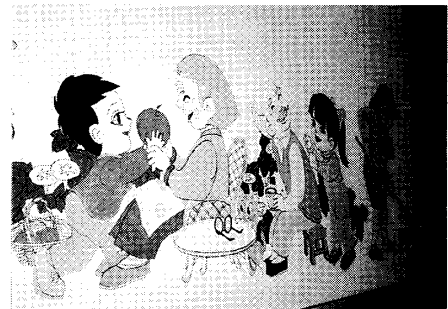
目的：民間文学の伝承、民族文化の拡大、民間文学を愛好する人材の育成。民話、民間伝説を整理する。

実施：哈爾濱市文芸連合組合の指導の下で哈爾濱市に所属する各県、区などの文芸連合組合によって、収集、整理、再創作などを行っている。

成果：『中国民間故事集成』（哈爾濱巻）を出版した。

4) 中国調査からの民話例

次は中国の研究協力者である哈爾濱工業大学耿鉄珍教授から届いた黒竜江省の名前の由来となる民話である。



哈爾濱市内幼稚園、壁の絵

「尾のない李さん」

「昔、黒竜江を『黒竜江』と言わなかったそうだ。そのときにはその河には白い竜が住んでいたそうだ。よく騒動を引き起こして、川を氾濫させたり、畑を荒らしたりしていたので、人家も稀なところがあった。

山東には李という一家があり、人身竜尾の子供が生まれたので、お化けだと思われたお父さんに尾を切られたそうだ。するとこの子は叫びながら、東北の方へ走っていった。黒竜江の岸に来ると孤独の老人に遭った。それで、その少年は若い青年に姿を変えて、その老人と一緒に生活するようになった。ある日、老人は一匹の尾のない黒竜が畑を耕しているのを見つけた。もう自分の身分を隠すことができなくなると思った黒竜は身の上をその老人に訴えた。そして、川に住もうとあったが、老人は川には白竜が住んでいて、悪事を働いていることを教えた。

黒竜は人民のために害を除くことを決心した。すると郷里の人を集めて、『私は白竜を殺しに行くから、もし黒波を見たら、その中に饅頭を投げてくれ、それを食べると力が出てくるから、もし白波を見たら、中に石を投げてくれ、白竜はそれを食べたら腹が痛くなるから、私が彼に勝つことができる』と教えて行った。黒竜は、川に飛び込んで白竜と戦った。人々は川の岸に立って、黒竜の言ったとおりにした。何日間かの激戦によって、黒竜はやっと勝った。その後、川岸の人々は幸せな生活を送るようになった。黒竜を記念するために、この川を黒竜江と呼んでいるのである。

4. フィンランド調査の概要

平成15年8月末より9月初旬にかけ、山谷、ヤング、佐々木が直接フィンランドに赴き、聞き取り調査を行った。事前に郵送による調査を計画し、北海道フィンランド協会、フィンランド大使館の協力を仰ぎ、また、学外研究員の協力のもとで訪問先を下記のとおりヘルシンキ、ルオベシ、ラップランド地方の16箇所を選定した。その調査の概要は以下の通りである。

(1) 調査の概要

- 1) ヘルシンキにおける調査ーフィンランド文芸協会、ヘルシンキ大学、文部省、国立博物館、セウラサーリ屋外博物館、アテネウム美術館
- 2) ルオベシーノイタカラヤット実行委員会、コミュニティセンター、ルオベシ屋外博物館
- 3) ラップランド地方（ロヴァニエミ、イナリ、イヴァロ）ーアルクティウム、ラップランド大学、ロヴァニエミ市立図書館、SIIDA（サーメ民族博物館）、サーミ民族ラジオ局、サーミ民族保育所、サーミ民族の伝統文化継承者宅、イナリ郡教育委員会

(2) 特徴的な訪問先の紹介

1) セウラサーリ屋外博物館

セウラサーリ島は、ヘルシンキ市の北西部に位置し、1880年代から市民の憩いの場として賑わってきたが、1882年に橋が架けられ1909年11月に博物館となった。ここにはフィンランド全土から18～19世紀初頭にかけて建てられた地方ごとに特長的な85の建物を移築して展示している。毎年開催される夏至祭には、伝統的な地域行事としてヘルシンキ市民はもとより世界各国から観光客が集まる。



「芸術の夜」街角のパフォーマンス

＜「芸術の夜」との関連＞

ヘルシンキでは、毎年8月末に夏の終わりを惜しんで「芸術の夜」というイベントを開催する。このイベントは、1990年代初頭にヘルシンキ大学の学生によって始められ、次第に市民に根付いたものである。参加は自由であり、街中のいたるところで任意のグループが、楽器の演奏、踊り等、様々なパフォーマンスを繰り広げている。参加者の多くは若者であるが、その中に民族衣装を身にまとい、アコーディオンの伴奏で民族音楽を歌いながら踊る中高年齢のグループもある。彼らは、セウラサーリが主催する民族的な事業にも協力的に参加しており、セウラサーリの、民族の文化や行事の保存に対する認識と共通している。

2) ルオベシ、野外劇「魔女裁判」

ルオベシでは15～6世紀にヨーロッパで沸き起こった「ノイタカラヤット」(魔女裁判)の野外劇が夏祭りに実演されている。その祭りの企画、演じる戯曲の編集・演出を担当する方との話し合の機会をもった。ルオベシのノイタカラヤットの特徴は、他の町が似たような祭りの際に国の中央から人気スターを呼び集客していることに対し、ルオベシでは、ルオベシ在住者のボランティアの参加による住民の手づくりである。家族と一緒に観ることで、感動して泣いたり恐れを抱くなど同じ感情を共有することができる、大人も子どもも楽しみな年中行事になっている。

3) サーミ民族の言語による文化の伝承

サーミ民族は文化の継承および伝承には民族の言語を使用することが非常に大切であるととらえ、次のようなことを実施している。これは、サーミ語の継承者が若年世代に育っていないことを問題視することの表われであると捉えられる。

①サーミ語によるラジオ放送

イナリ地区では、「サーミ民族」の言語によるラジオ放送が一日中放送されている状況も視察することができた。これは、1947年にフィンランド中西部のオウル市からごく少量のサーミ語による放送を試験的に行ったことが始まりであり、1991年から完全にサーミ語のみによる放送が現在の場所で実施されている。民族の言語、文化を継承することの地道な努力がなされていることに感銘を受けるとともに、その運営の困難さについても意見交流を行った。



サーミ民族ラジオ局での協議風景

②サーミ語のみ使用の保育所

現在のサーミ民族の一般家庭での使用言語はフィンランド語が主流であり、子どもたちはサーミ語を知らずに育っている。そのため、小学校、中学校ではサーミ語を母語、または第一外国語として教科指導をしているという事情により、初めてサーミ語に触れる多くの子どもたちが自己の民族の言葉として自在に使用するまでなるのは困難があった。そのような理由からイナリ地区では、6年前からサーミ語のみの保育を実施してきた。その成果は徐々に表れている

という。この保育所での困難な点として、幼児教育に必要な絵本などに使用されている言語の多くがフィンランド語であり、サーミ語がほとんどないことがあげられていた。そこで言葉の部分に印字したサーミ語の切り貼りをする工夫がみられた。

該当保育所を訪れ、現地の教育委員会担当者との話し合いの機会により、そのような事情を理解することができた。



サーミ民族保育所の子どもたち

4) フィンランド調査からの民話例

ロバニエミ市立図書館においては、日本語による民話の文献にも触れることができた。その中には、魔術師と魔女について次のような一文が掲載されていた。(抜粋)

古代ラップランド（フィンランド北部地方）では、魔女や魔術師にこと欠くことはなかった。魔術師とは超自然的な能力を持っている人のことを意味した。過去に生き、未来を見通した。……魔術師はお墓の土まんじゅうの上に寝ながら地面の音を聞き、その能力を磨いた。……牧師とはあまり仲が良くないこともあり、村には住めなかった。……魔術師は、自分の魂を身体から遊離することができた。この儀式のために、太鼓と7つの斑点のある紅天狗ダケが用いられた。……地上ではオオカミ、地下では蛇、水中では川カマスの中に姿を隠し旅をした。……

V. 現段階での課題と今後の展望

本研究が掲げた目的は、冒頭で述べたとおり民話や伝統芸能・祭り・地域行事に視点を当て、それらに含まれる世代を超えて伝えられる文化の発掘とその伝承の方法、さらに、教育的意義について国際的な比較研究を行うことである。しかし、これらに関する単なる比較研究ではなく、地域住民に研究の成果を発信し、その活用を図り、日常生活における生活の質の向上に寄与することに重点を置いている。

それらを勘案しながら現在までの調査過程を概観すると、北海道、カナダ、フィンランド、中国東北部いずれの地域においても文化の伝承に対する意識に共通項があることが窺われる。一つは、先人の残した文化を次代に伝承することを重要とし、そのための方策をとっていることである。もう一つは、それらの文化について学校教育、および地域の教育で子どもを対象とした活動が行なわれていることである。文化の伝承が子どもを中心に置くのは半ば自明とも言えるが、それを教育に織り込むのは容易なことではない。無論、その方法には各々の国や民族性による違いがあり、それは民話でもあり伝統芸能や地域行事でもある。そのような文化の伝承について、言語が大きな要素として捉えられていることもこの度の調査で再認識した。文字言語を持たない民族は、口承による伝承をしてきたが、それだけでは文化の断絶になりかねないということから、文字に残す努力をしている民俗も複数あった。一例であるが、カナダ・ビクトリア州の海洋民族であるSaanichi First Nationでは、使用言語が音声のみであったため、コンピュータで音声による辞書を製作中であった。コンピュータに音声を吹き込み、それに現在

の使用言語である英語で発音を加える方法により自らの民族の文化を書き記す形で残そうという意図である。このような民族の努力は高く評価されることではあるが、次のような問題を包含していることも浮かび上がった。本研究プロジェクトが収集した資料は、それぞれの民族が自らの民族の言語で言い伝えられた民話を英語あるいは、フィンランド語等の文字言語に書き改めたものであり、その表記、表現には、邦訳に困難をきたすものが含まれていることである。したがって、これらの資料を本研究の目的に添って分類、分析することに多くの時間を必要とすることが課題として残る。しかしながら、研究経過を本研究プロジェクトの目的に則して見れば、現時点において4カ国における文化の伝承の状況とそこから生じる次世代への教育的意義についてある程度成果を得られ、今後の研究継続への弾みがついたことは確かである。

これまで実施した海外調査のうちフィンランドと中国においては、学外研究員の協力なしには実現が困難であった。北海道調査においても、研究過程で北海道の民話研究を長年継続してきた高田紀子氏の協力を得たことが、資料収集において多大な力となった。今後も、カナダ、フィンランド、中国にて収集した膨大な資料をもとに、研究完成年に向けて、所期の目的達成のために学外研究員の協力を得ながら、意欲的に進めていく所存である。

- 付記
1. 調査にご協力いただいた北海道内、カナダ、フィンランド、中国の関係機関および皆様方に深く感謝申しあげる。
 2. 紙幅の制約により本稿で紹介できなかった他の内容については、今後新たに発生することと併せて次の機会に譲りたい。
 3. この報告の概要は、日本生涯教育学会北海道支部研究会（2003.9.27）で発表した。
 4. この調査研究は、北海道浅井学園大学学術フロンティア研究の一環として実施している。

【注】

¹ 阿部敏夫「北海道民話の研究」北星学園大学文学部北星論集第40号

この研究は、北海道の民話に関する研究のみでなく、民話研究について膨大な研究資料を収集していると同時に長い期間をかけてまとめたものである。今回の私たちの研究に関する基礎的・基本的研究、さらに、全体研究計画に大きな示唆を与えるものである。参考、引用に対してここで付して感謝する。

² Diamond Jenness "The Indians of Canada Seventh edition " University of Toronto Press, 1977

³ Percy Bull Child "Napi Legends (Large Print)" Property of Head—Smashed—in Buffalo Jump

⁴ Uuttu—Kalle, "ラップランド発見" Translated By Hiroko Kawamura Palmunen, yrityskiejatoy oy, 1997